

エコ・へるす

長野県環境保全研究所ニュース 平成 19年(2007年)3月25日発行

安茂里庁舎 〒380-0944 長野市安茂里米村1978 TEL 026-227-0354 FAX 026-224-3415
 飯綱庁舎 〒381-0075 長野市北郷 2054-120 TEL 026-239-1031 FAX 026-239-2929
 http://www.pref.nagano.jp/xseikan/khozen Email:kanken@pref.nagano.jp

春のお悩み * 今年の長野県のスギ花粉

今シーズンの飛散開始は早目

寒い冬が終わり、ようやく暖かい春です。ココロも身体もうきうきするはずが・・・憂鬱な気分になる方も多いのがこの季節。花粉症です。いまや日本の人口の約16%は花粉症であると考えられていて、その約70%はスギ花粉による花粉症と推察されています。

スギ花粉は7月のはじめごろから10月の終わりごろまでの間に雄花の中で作られ冬を越し、暖かくなると雄花が開花し、飛散を始めます。長野県内は2月中旬から3月上旬に飛散が始まり、3月下旬から4月上旬にピークを迎え、4月下旬から5月上旬ごろに終息となることが多いのですが、今年は飯田市で2月10日、飯山市・長野市・上田市および松本市で2月20日と、例年に比べ早い飛散開始となりました。

花粉飛散量の測定方法

花粉情報等では、1平方センチメートルあたりの付着花粉数が示されます。花粉の飛散量は屋外に設置したダラム型花粉捕集装置にワセリンを塗ったスライドガラスを置き、24時間放置後回収し、見やすい



ダラム型花粉捕集装置

よう染色をして顕微鏡で数えます。長野県内では環境保全研究所のほか、北信保健所(飯山市)、上田保健所(上田市)、松本保健所(松本市)、飯田保健所(飯田市)で計測しています。

花粉症とその対策

花粉症は身体が花粉を「異物」と認識し、体外へ排除しようとすることにより起こります。涙や鼻水で花粉を洗い流し、くしゃみで花粉を吹き飛ばそうとするのです。つらい症状に悩まされないためには身体の中に花粉を入れないことが大切になります。

そのためには、晴れて気温が高い日、空気が乾燥して風が強い日、また雨上がりの翌日は花粉が飛散しやすいことを念頭におきながら、「花粉のつきにくい服を身に着ける(ウールなど毛足の長いものは花粉がつきやすい)」「めがね、帽子、マスクをつける」「玄関前で花粉を払い落とす。同様に外に干した洗濯物や布団を取り込むときもよく払い落とす」「うがい、洗顔、鼻をかむ」「室内はぬれ雑巾でこまめに拭き掃除をする」などの自己防衛をするとともに、規則正しい生活やバランスのよい食事をとってストレスをためないようにし、身体の抵抗力を高めておくことが大切です。また、タバコは粘膜を傷つけることがあるので避けましょう。

今は花粉症でない方も、身体に入る花粉を少なくすることで将来の花粉症発症予防にもなります。

日本気象協会長野支店では、今シーズンのスギ・ヒノキ花粉飛散量は平年の45~85%程度、花粉飛散の少なかった昨シーズンと比べると2~4倍と予測しています。花粉飛散量が少ないといっても油断は禁物。

これまでたくさんの花粉を吸い込んでいれば、あなたのカラダも花粉症発症準備が整っているかも知れません。

(畔上由佳 kanken-hoken@pref.nagano.jp)

参考資料) 環境省 花粉症保健指導マニュアル - 平成18年3月改訂版 -
 厚生労働省 花粉症的確な花粉症の治療のために(2005)
 (財)日本気象協会長野支店 花粉飛散予測資料平成19年春の花粉飛散について

目次	春のお悩み*今年の長野県のスギ花粉・・・1	公開セミナーの実施報告・・・5
	トピックス 1・2・・・2	学会いろいろ・・・6
	トピックス 3・4・・・3	出前講座ご案内・・・7
	特別寄稿「環境保全研究所・温故知新」・・・4	主催イベントのご案内・・・8

トピックス

「全国ギフチョウ・ヒメギフチョウ保全シンポジウム」に参加しました

春先の里山の落葉広葉樹林で、林縁や林床に明るい光がそそぐと、そこにカタクリやスミレの花が咲き、ギフチョウやヒメギフチョウが吸蜜にやってきます。しかしこれらのチョウの姿を目にすることが、近年次第にむづかしくなってきました。里山に人手があまり入らなくなったことによる森林の鬱閉化や、生息地の里山林の破壊、一部の愛好家などによる乱獲がその原因とされています。

このギフチョウとヒメギフチョウの研究と保全に取り組む研究者や市民グループが今年1月20日、一般の参加者とともに全国から岐阜市に集まり、NPO法人日本チョウ類保全協会の主催するシンポジウムで一堂に会しました。当研究所からも主催者の招きに応じてこれに参加し、白馬村のギフチョウ生息地で8年間おこなってきた林床の下刈りの効果に関するモニタリング調査の成果を発表しました。国の研究機関や大学、各地の市民グループからもそれぞれの研究や活動についての発表がありました。

発表では、各地でこれらのチョウの衰退がおこっており、里山の自然のシンボルとして下刈りや枝打ち・パトロールなどの保全活動がおこなわれている様子などが紹介されました。またギフチョウは地域により食草が異なり、たがいに遺伝的に分化している可能性もあることから、他の地域のギフチョウを飼育して放蝶することの問題点も指摘されました。総合討論では、今後相互の連携を深め、情報を交換し、広く自然環境の保全に向けてより多くの方々の関心を高めるため協力し合うことなどが話し合われました。参加者は250名を越え、会議の様子はテレビと新聞でも報道されました。

(須賀 丈 kanken-shizen@pref.nagano.jp)



白馬村のギフチョウについての講演の様子

生ごみ処理機で生成したコンポストの安全性

食堂等の食品関係施設からでる生ごみは、その資源化再利用の方法が十分確立していないため、焼却・埋立て処分され、大気汚染、水質汚濁、地球温暖化などの要因になっています。

しかし一方で、最近、食品関連施設・家庭から出る生ごみを堆肥化したいという方々が増加しています。そこで多くの市町村では、家庭用生ごみ処理機の購入にあたっては、補助金制度を導入しています。既に同制度をご利用の方も少なくないと思います。

生ゴミ処理機には、生ごみ乾燥装置(乾燥減量)、コンポスト化装置(微生物分解・乾燥減量)等の他に、ダンボールに入れた生ごみを微生物分解する装置などがあります。ところが、それらの生ごみ処理機で生成されたコンポストの安全性については、あまり気にされていません。しかし、作物は直接口に入れるわけですから、製造したコンポストを堆肥として利用する場合、その安全性は気になるところです。

そこで、当所では、レストランから出た生ごみを「生ごみ処理機」により処理し、生成されたコンポストについて重金属の含有量を調べてみました。その結果、重金属については基準以下*であることがわかりました。また、一般家庭から収集した生ごみからコンポストを製造している堆肥センターのコンポストについても同様の結果でした。

* 肥料取締法に基づく公定規格で、金属ごとに含有が許される最大量が定められています。(例えば以下)
水銀2・カドミウム5・砒素50・鉛100・ニッケル300・クロム500(単位:mg/kg)



生ゴミ処理機で生ゴミを堆肥にする

(佐藤民雄 kanken-junkan@pref.nagano.jp)

トピックス

化学物質環境実態調査 環境科学セミナーに参加して



環境調査のサンプリング時(平成18年10月10日)の諏訪湖

環境省が主催する化学物質環境実態調査 環境科学セミナーが、平成19年1月25～26日に東京で開催され、参加しました。

化学物質環境実態調査は、昭和49年から化学物質の一般環境中の残留実態を把握するために実施され、その結果は化学物質対策に活用されてきました。化学物質の中には外因性内分泌攪乱化学物質の様に低濃度でも人の健康や生態系に悪影響を与えるおそれのある物質が存在するので、より微量を検出する高感度で精度の高い分析が求められています。調査は地方環境研究所や民間検査機関が参加して行われており、長野県も参加しています。内容はサンプリング、分析、精度管理、結果の報告、分析法の開発など多岐にわたっています。左の写真は、今年度の環境調査で湖心の水と泥を採取した時の諏訪湖の様子です。

環境省はこの調査の円滑な推進のために「化学物質環境実態調査実施の手引き」を作成し、今回のセミナーにおいて、手引きの執筆者による内容の説明が行われました。

セミナーの中では、検体の採取及び調製方法、分析、データ解析と精度管理、分析法開発等について説明がありました。河川の採取点の選び方や、示された検出下限値を確保できなかった場合どうするか等、いろいろな質問が出されていました。手引きやマニュアルは基本ですが、状況に応じて創意と工夫が必要であることを感じました。

この調査の結果は環境省のホームページ <http://www.env.go.jp/chem/i/ku-rohon/index.htm> で公表されています。(渡辺哲子 kanken-hozen@pref.nagano.jp)

平成18年度長野県精度管理調査結果検討会



特別講演時の質疑応答

計量検査機関にとって最も重要なことは、一定レベルの検査技術の水準を常に確保し、求められたデータを正確に出すことです。日進月歩で性能があがっていく測定機器類を扱いながら、この要請に応えるためには、機会あるごとに分析精度を維持する努力が求められています。

そのための1つの方法として、長野県では、昭和53年(1978年)度から分析に関する精度管理調査を継続して行ってきました。調査は長野県衛生部薬事管理課が主催し当研究所が実施しています。本年度は、県、市、公社などの公的検査機関及び民間の計量証明機関等あわせて64機関に参加していただきました。

精度管理調査は、例年、細菌・添加物・医薬品・環境試料について実施しています。本年度は環境試料として新たに環境基準が定め

られた亜鉛を対象に含めました。その最終的な結果についての検討会を、2月19日に長野市若里市民文化ホールで開催しました。本年度はいずれの項目についても良好な結果が得られました。参加機関のご協力に感謝すると共に、来年度も精度管理調査への積極的な参加をお願いし、あわせて本事業に対する忌憚のないご意見をお願いいたします。

また、検討会に合わせて(財)日本環境衛生センター酸性雨研究センターの情報管理部長 仲山伸次 先生をお招きし、「東アジア地域における酸性雨と精度管理について」と題して特別講演をしていただきました。会場には約90名の皆さんが出席され、調査結果の検討同様、特別講演にも熱心に聞き入っておられました。

(宮川あし子 kanker@pref.nagano.jp)

環境保全研究所・温故知新

定年退職予定の研究職員から長野県の環境保全・保健衛生へのメッセージ

故をたず訊ねて新しきを創る
～あきらめない～

公害華やかなりし頃の昭和50年に県職員のスタートをきりました。当時の諏訪湖の水質は最悪でした。アオコが水面を覆いつくし湖面に盛り上がり、マイナスの透明度は諏訪湖の象徴でした。その諏訪湖の浄化に向けて、行政と研究所が一体となって取り組んだ調査が、ついこの間のように懐かしく思い出されます。諏訪湖は午後になると風が出て、ひどいときには白い波頭が立ちます。こうなると湖にボートで出るのはまず無理です。転覆の危険があるからです。そのため、早朝からの調査のために、前日から諏訪に入ったものです。

昨年10月、環境講演会で、沖野外輝夫先生が諏訪湖の浄化対策の歴史を紹介されました。多くの困難がありながらも努力の甲斐あって、「諏訪湖の水質、生態がかわりつつある」と述べておられました。諏訪湖にも浄化の兆しが訪れたということです。30年前には絶望的な気持ちでアオコを眺めていたことを思うと、感無量でした。あきらめないで取り組むことの重要さをあらためて噛みしめました。

その後、公害行政は、平成5年ごろからは廃棄物対策が、さらに平成10年ごろからは地球温暖化防止対策が喫緊の課題として浮上してきました。また、長野冬季オリンピックを契機に平成8年に自然保護研究所が発足しました。そして、平成16年、衛生公害研究所と自然保護研究所が統合し、環境保全研究所が発足しました。衛生研究所としてスタートした当研究所は、公害部門を加え、さらに自然保護部門をも統合した総合研究所となりました。県民の健康から環境までを総合的に扱う技術者組織が長野県に生まれたことは画期的なことだと考えられます。

統合による組織的な課題は少なくありません。変化に即応し絶えず自己変革を遂げることは、公的機関には難しいことかもしれません。しかし、県民の安全と安心のために、あきらめることなく新しい課題・目標に向かって努力を進めるべきだと思います。

研究所の活動と変革に対し、みなさまのより一層のご理解とご支援をお願いいたします。

(河野行雄 研究技監兼次長)

新たな課題への対応
～果敢にかつ慎重に～

昭和46年に県職員となって36年、そのうちの四分の三を研究所に関わってきました。その経験からいえることは、研究所は常に新たな課題と向き合う可能性があるということです。いくつか例を挙げてみたいと思います。

県内の施設で食中毒が発生したことがありました。情報を総合すると、アブラボウズとアブラソコムツという深海魚の油が中毒の原因であることがわかってきました。前者はトクグリセリドの含有量が多いため、単純な消化不良を、後者は通常の脂質と違う、深海魚特有の高級脂肪酸の高級アルコールエステルが原因で、消化ができないために起こる下痢症状でした。これらの商品が生産地から幾つかの県の市場を経由するうちに名前を変え(アブラボウ、ギンムツ等)、形を変えて(味噌漬け、ミリン漬け等の切り身等)流通していました。

平成6～7年ごろ、飯田市で稲の生育被害が発生しました。2年続きの被害に、原因がわからず頭を痛めていた行政当局からの要請で、農政部と共同で原因究明に当たりました。その結果、非農耕地用除草剤(今では発売されていない)が非適正な処理により農耕地にたまたままぎれこんだことが原因とわかりました。部局の縦割りを越えた協力体制が功を奏した事例です。

最近の例として、下伊那郡の農村での地下水汚染原因究明調査を最後にあげます。これは、研究所が調査の全般を企画立案し、いわば調査のコーディネートを担当したもので、今後の環境行政に多くの課題を投げかけることになったと思います。予算面の検討(これは主に県庁で)、地元市町村や住民等の関係者との調整や方法論の検討、専門家アドバイザーを探して承諾を得ること、また実際の調査の実施、一部は外部機関への依頼調査(事務は県庁)、結果のまとめや報告書の作成に至る作業を総合的に行いました。

以上、ごく一部ですが、今後もさらに多くの新たな課題が生じると思います。そのときに、期待される結果を出すには、果敢にかつ慎重に対応することが重要です。

(林 弘道 環境保全部長)

報告

公開セミナーを開催しました

伊那市と大町市で研究所の日頃の研究成果に基づく公開セミナーを開催し、多くの方のご参加をいただきました(両会場あわせて227名)ありがとうございました。

今年は「信州の自然に今おこっていること」というテーマで、ポスター展と2部構成の講演会をおこないました。ポスター展では、研究所の事業や研究成果をポスターにし、その前で職員が解説をしたり質問に答えたりしました。講演会では、最初に「外来生物について」3題、続けて「地域の自然について」3題のリレー講演をおこないました。パネル展示とあわせて、さまざまな質問やご意見をいただきました。これらのご意見を、今後の研究所の活動に積極的に活かしてまいりたいと考えております。

伊那市 会場

日時：2月3日(土) 12:00~16:00
場所：長野県伊那合同庁舎(5階講堂)
参加者：85名

プログラム:

ポスター展示 12:00~13:00

リレー講演会 13:00~16:00

外来生物について

- 1 信州の自然を脅かす外来生物(大塚 孝一)
- 2 下伊那に侵入した外来鳥類ソウシチョウ(堀田昌伸)
- 3 花とマルハナバチに何が起るのか?(須賀 丈)

地域の自然について

- 4 中央アルプスのエーデルワイス
コマウスユキソウの生活(尾関 雅章)
- 5 南アルプスの希少植物
ヤシャイノデの現状(大塚 孝一)
- 6 硝酸性窒素による農山村地域での
地下水汚染(堀 順一)



ポスター展示: 解説と質疑応答



講演会での発表



講演会後の質疑応答

大町市 会場

日時：2月17日(土) 12:00~16:00
場所：サン・アルプス大町(2階大会議室)
参加者：142名

プログラム:

ポスター展示 12:00~13:00

リレー講演会 13:00~16:00

外来生物について

- 1 信州の自然を脅かす外来生物(大塚 孝一)
- 2 長野県にひそかに侵入した魚介類(北野 聡)
- 3 ニセアカシア林の林相転換(前河 正昭)

地域の自然について

- 4 八方尾根での酸性雨調査(原田 勉)
- 5 ツキノワグマが人里に出没するのは、なぜ?
(岸元 良輔)
- 6 雑木林の下刈りによる白馬村の
ギフチョウの保全(須賀 丈)



ポスター展示:
自由に見学できます



会場で質問に応える職員



講演会での発表



会場の様子

学会いろいろ

研究所と関わりのある学会を紹介します！

人文地理学会

自然環境を理解するには、自然そのものを調べる他に、人との関わりを調べる方法があります。そうした自然と人との関わりを明らかにするのが人文地理学の主な課題の一つです。人文地理学会は、1948年に発足した人文地理学の全国的学会です。会員は大学・公立の研究機関・博物館の研究者、大学院生・学生、中学・高校教員が多く、会員数は約1500人です。主に①機関誌『人文地理』(年6冊)の編集・発行、②大会(年1回)の開催、③例会・研究部会の開催、④公開セミナーの開催、⑤『地理学文献目録』の編集などの活動を行っています。大会は毎年11月に開催され、3日間にわたり特別研究発表、一般研究発表、ポスター研究発表が行われ、毎年500名を超える参加者が集まります。

2006年大会は、昨年11月11日から13日にかけて、東大阪市の近畿大学で開催されました。印象的だったのは、GIS研究者と歴史地理研究者が絵図などの絵画史料とGISを用いて近世京都の町並み景観を3次元で再現することを試みた発表でした。自然環境の研究においても歴史史料から過去の自然景観を3次元で再現できれば、自然環境の変遷を考察する際に2次元では得られない視角を提示できると思われまます。また、明治から現在の日本の土地利用変化を分析した発表では、一般的に高度成長期以降都市化により農地が減少したと考えられていますが、実際は資本蓄積により大規模開拓がすすみ農地が増えており、むしろ減少したのは荒地や湿地であったとの報告がなされました。その他、大和野の市民の里山保全活動、近世農書の著者の環境観、関東地方の高度経済成長期以降の耕作放棄地率の分布変化に関する研究発表などもありました。

(浦山佳恵 kanken-junkan@pref.nagano.jp)



機関誌『人文地理』と地理学文献目録

日本騒音制御工学会

日本騒音制御工学会は、音響の問題を学術的に研究するというよりも、騒音などをどうやって減らすかといった実際に騒音を制御する(減らす)ことを目指す応用技術重視の学会といえます。制御するためには、測定、解析、対策などの幅広い知識が必要で、このため、騒音・振動に関する多分野の研究発表や情報交換が行われています。現場対策に携わる自治体の環境研究所員も多く参加しており、当研究所にも工学会員がいます。

今年は4月26日に産業技術総合研究所臨海副都心センターで、9月12~13日に中央大学理工学部後楽園キャンパスで研究発表会が開催される予定です。

当研究所では、「長野行き新幹線」が開業以来10年となることから、この間の騒音変化を中心に鉄道騒音を取りまとめています。東海道、東北新幹線では、「のぞみ」や「2階建てMAX」などの登場で、車両構成が変わっていくのですが、長野新幹線では車両の変化が無く、純粋な経年変化がわかるかも知れません。新しい知見が得られましたらこの学会で発表しようと考えています。

また、工場・事業所の騒音規制手法は、従来の時間率レベル(L5)規制から等価騒音レベル(LAeq)による規制に変わっていくとアナウンスされています。当所でもこれにそなえて、L5による評価とLAeqによる評価の比較などを行っています。これも取りまとめて、その成果を秋の研究発表会で発表し、他の多くの機関と情報交換しながら、長野県の騒音規制業務に役立てていきたいと考えています。

(内田英夫 kanken-hozen@pref.nagano.jp)



新幹線騒音調査風景(右下にあるのが集音装置)

出前講座

テーマと講師のご案内

研究所では、ご要望の多いテーマを50程設定して講師の派遣を無料で行っています。おおよそ20名程度の参加者が集まれば出かけます。講座のテーマについて、講師を務める職員から紹介いたします。ピンときたらすぐ出前をお申し込みください。なお、その他のテーマについてはホームページをご覧ください。また一覧に掲載されていないテーマでもご希望に沿える場合がありますので、お気軽にご相談ください。



人里にすむ絶滅危惧種
オオルリシジミ

生物の多様性とその保全

生物の多様性とは、生物圏にみられる遺伝子から景観までのさまざまなレベルの多様性の総称です。この多様性は、資源の供給や生態系のはたらきを通じた快適な環境の維持、文化の多様性の基盤などのかたちで、さまざまな恩恵を人間にもたらしてきました。しかし今、人間活動の影響で生物種が絶滅していく速度は、先史時代の千倍に達するともいわれます。生物の多様性を保全するとは、地域ごとに古くからある自然の特色や生態系のつながりを大切にすることです。この地域の自然の特色と伝統的な人の暮らしが結びついて、信州のように特色のある地域の風土がかたちづくられてきました。この多様性を守るための取り組みについて、具体的に解説します。

(須賀 丈 kanken shizen@pref.nagano.jp)

通常、健康な人の耳では20Hzから20kHzまでの音を聞くことができるといわれています。もちろん老化や難聴などでこの範囲の音を聞こえない人もいます。逆に通常は聞こえないとされる音を感じることでできる人もいます。一般的には、やっと感じることができる程度の音はあまり気にならないものですが、20Hz以下の音(超低周波音)や80Hz以下の音(低周波音)は、80Hz以上のいわゆる騒音に比べて迷惑感が大きいようです。当研究所でも年に数回、低周波音の苦情を受けて測定を行っていますが、騒音として計ると環境基準以下になってしまうため、低周波音として騒音とは別に正確な測定・評価をする必要があります。このような不思議な低周波音についてお話しします。

(内田英夫 kanken-hozen@pref.nagano.jp)



リニア新幹線の低周波音は？



小型風力発電機

地球温暖化について

地球温暖化防止のため、日本は、温暖化ガスの排出削減量を1990年比マイナス6%と約束しました。しかし、実際には、その後も温暖化ガスの排出量は増え続けているため、今から約14%もの削減をしなければなりません。また、地球温暖化による気温上昇を+2に抑えるためには、温暖化ガスを2050年までに70%以上削減する低炭素社会を実現させることが必要とも言われています。一方で、温暖化ガスの増加や気候の変動の様子は目に見えないため、温暖化防止対策はなかなか進まないのが現状です。講座では、温暖化防止対策が少しでも進むよう、長野県における地球温暖化の現状とそれによる影響をわかりやすくお話しし、あわせて家庭でできる温暖化防止対策などをご紹介します。

(浜田 崇 kanken-junkan@pref.nagano.jp)

大気中の化学物質(有害大気汚染物質の現状)

車から主に排出されるベンゼン、工場から排出されるトリクロロエチレンやジクロロメタンなどの物質の他に、植物・土壌・海洋などの自然界から出てくる物質など、大気中にはさまざまな物質が存在しています。それらの中には、長期的にそれらに触れることによる健康影響が懸念され、環境基準や指針値が決められているものもあります。それらの物質を毎月モニタリングしています。測定地点では写真のような容器に空気を採取し、実験室に持ち帰って分析します。これらの大気中の化学物質の動向について、長野県内外の状況等をお話しします。

(土屋としみ kanken-hozen@pref.nagano.jp)



空気の採取容器

お問合せ・お申込み/研究所に直接、電話、ファックス、ハガキ、電子メールでお申し込みください

平成19年(2007年)度イベントのご案内

自然ふれあい講座

1. 自然の散策・体験

県内の自然の中から、ふだんあまり行くことのない夜の自然林・千曲川源流域・中央アルプス山岳地域を研究所のスタッフがご案内し、地域の自然の価値について一緒に考えます。

1. 春の夜の自然林～動物の気配を感じて

夜の自然林で野生動物の気配等を感じるにより、森林の豊かさを体験してもらいます。

5月26日(土) 17:30～21:00 長野市戸隠 定員:20名(小学校高学年以上) 担当:岸元良輔

2. 千曲川源流域・自然散策

千曲川源流域の森を散策し、鳥などの生き物の観察をしながら川と森の関係について考えます。

6月10日(日) 9:30～12:30 川上村千曲川減流域 定員:20名(小学校高学年以上) 担当:堀田昌伸

3. 自然史王国信州を歩く～山岳編

千畳敷カールを散策しながら、岩石と氷河の秘密、高山の魅力を訪ねます。

9月9日(日) 10:00～14:00 木曾駒ヶ岳千畳敷カール 定員:20名(中学生以上) 担当:富樫均

2. 変わりゆく里山・草原～研究プロジェクトの成果から

霧ヶ峰高原は草地として、中条村では傾斜地を農地等として、人々が生活のために利用してきた里山です。しかし今、里山は大きく変化をしています。研究プロジェクトの成果から、里山の今とこれからを考えます。

1. 変わりゆく草原のチョウと植物

かつて採草地であった霧ヶ峰高原のかわりゆくようすをチョウと植物から見つめてみます。

7月22日(日) 9:00～12:00 霧ヶ峰高原 定員:20名(中学生以上) 担当:須賀丈

2. 霧ヶ峰草原の移り変りを探る

旧版地形図等のさまざまな情報から、近年の霧ヶ峰草原の広がりの変化を確かめてみます。

10月14日(日) 10:00～15:00 霧ヶ峰自然保護センター 定員:20名(中学生以上) 担当:尾関雅章

3. 変わりゆく里山のくらし

中条村での里山研究の結果から、里山での暮らしの変化とこれからを考えます。

12月2日(日) 13:00～15:30 中条村公民館 定員:20名(中学生以上) 担当:畑中健一郎 浦山佳恵

3. 人の活動と環境変化～調べてみよう

私たちの暮らしが環境と深く関わっていることを、里山ピオトープ・まちのヒートアイランド現象・湖の水草復元という3つの視点から考えます。

1. 里山ピオトープ:春の調査体験

里山ピオトープ試験林内の自然観察・植生調査を行い、里山の手入れを体験します。

6月17日(日) 10:00～15:00 長野市戸隠 定員:20名(中学生以上) 担当:前河正昭

2. ぼくらのまちの体温測定

まちが熱くなる原因と対策を、さまざまなものの温度を測りながら一緒に考えます。

8月1日(水) 10:30～12:30 松本市 定員:30名(小学校高学年以上) 担当:浜田崇

3. 野尻湖の水草観察

ソウギョの放流で壊滅した野尻湖の水草が、最近復元されつつあります。そのようすを観察します。

8月25日(土) 10:00～12:00 野尻湖畔 定員:20名(小学校高学年以上) 担当:北野聡

お問合せ・お申込み:研究所(飯綱庁舎)に直接、電話、ファックス、ハガキ、電子メールでお申し込みください。

参加は無料(傷害保険料として300円を負担いただく場合があります。) 日程等を変更する場合があります。

夏休み親子環境講座

夏休みに親子で一緒に環境の問題を考えてみましょう!

庁舎の施設公開に合わせて開催します。

日程:平成19年7月28日(土)・29日(日)<予定>

内容:飯綱庁舎/昆虫教室・植物教室

安茂里庁舎/せせらぎサイエンス・まちの体温測定

公開セミナーを開催します!

研究所の研究成果の中から、その時々話題や地域の課題と関連するテーマを取り上げて開催します。平成18年度の結果はP7に掲載しています。平成19年度の内容等は、決まり次第お知らせします。

編集後記

16号をお届けします。今回の内容はいかがでしたでしょうか。

本誌は、環境保全および保健衛生の問題で、研究所が提供することができる情報をわかりやすく提供することが目的です。お気づきのことがありましたら、お気軽にご連絡ください。

(編集担当:企画総務部)

次号のご案内

次号は5月に発行予定です。「トピックス」「最近の話題」「出前講座」「学会いろいろ」等を掲載予定です。